

岡千仞と王韜

中田吉信

目次

はじめに

東京府書籍館幹事岡千仞

太平天国と王韜

王韜の来日と東京府書籍館訪問

千仞の書籍館辞任と訪中

千仞の著書と墓のことなど

はじめに

支部上野図書館所蔵の東京府書籍館時代の綴り『明治十二年学務課往復綴(自十一年度後半ケ年至十二年度前半ケ年)』に次の三通の文書がとじこまれている。いま仮にこの文書に(甲)・(乙)・(丙)の番号を付すと、左のようである。

(甲)

学第四十号(朱字) 八月廿二日案(朱字)

幹事

帰山常吉

書籍館

学務課御中

(乙)

学第四十式号(朱字) 八月廿六日案(朱字)

別封老通清国王韜ヨリ知事公江差出シ候ニ付御回シ候
条至急御取計被成度殊ニ同人義ハ明早朝出立之由ニ付
御回答之義モ有之候ハ、本日中当館迄御送付被成候様
致度此段宜敷御取扱有之度候也

帰山常吉

書籍館

学務課

御中

過日清國王韜氏ヨリ別紙書目之通書籍七拾式本回送致
シ皇國書籍ト交換相願候ニ付テハ大日本史百冊并地球
儀中小式簡御下ケ渡シニ相成候様致度此段御決濟相成候
様御取計有之度候也

(別紙)

清國王韜ト交換書籍領収之分(朱字)

普法戰紀 同治十二年七月印行 八本 南海張宗良口訳
吳郡王 韜撰撰

右二部

瀛暎雜誌 光緒元年十月印行 二本 長洲王韜 甫

右二部

重訂西青散記 光緒四年三月印行 四本 金壇史霖林手定
句容裴 玠校梓

右二部

甕牖余談 光緒元年七月印行 四本 吳郡王韜 撰

右二部

遯窟調言 光緒元年正月印行 四本 甫里王韜 撰

右二部

海陬冶游錄 光緒四年六月印行 二本 滌北 玉歆(歆告) 撰
附錄余錄

右二部

豔史叢鈔 光緒四年八月印行 十一本 滌北 玉歆(告) 輯

右二部

毀園尺牘 光緒二年九月印行 四本 甫里逸民王韜 箸

右二部

以上十六部 七十八本

清國王韜ト交換書籍下渡シ之分(朱字)

目次

大日本史 百本

地球儀 大小 貳個

右為交換進呈

八月廿二日

大清國 王君座右

東京府書籍館

(丙)

供一覽(朱字)

過般清國人王韜氏ヨリ書籍七拾式本獻納候間皇國書籍
与交換相成度旨ヲ以テ大日本史百本并ニ地球儀中小式簡
差遣シ度旨過般御伺候処右伺之通り御裁下相成候間此
段御通知ニ及候条可然御取計相成度候也

八月三十日

学務課

書籍館

御中

念のため解説を加えると、(甲)と(乙)は東京府書籍館から府の学務課に差出した許可願の案であり、(丙)はこの願に對して学務課から館に送られてきた許可の決裁通知である。(甲)と(乙)の起案者帰山常吉は当時の東京府書籍館の「會計兼雜務掛」であり、(丙)の「供一覽」の下には「岡」の丸印が押されている。また(乙)の別紙目録の「豔史叢鈔」の項の「十一本」には「八本」とあったのを白紙を貼付して訂正した跡があり、総計の「以上十六部 七十八本」は「七十二本」とあったのを消して改めたあとがある。

この書類の内容は、いうまでもなく、清国人王韜と東京府書籍館との間の圖書の交換に関するものである。個人と館の間で圖書が交換されるということは稀なことであろうと思われるが、「国際交換」であることに間違いない。そしてこの「交換」の背後には、当時(明治十二年)来日して日本文士連の大歓迎を受けた清国人王韜と、時の東京府書籍館幹事岡千仞との間の、日中を結ぶ固い友情のきずなが秘められているといえよう。本稿では、この点に焦点を当てて、その周辺をさぐってみることにしたい。

東京府書籍館幹事岡千仞

岡千仞(一八三三—一九一四)の伝記は、最近東北工業大学教授宇野量介氏の手によって『鹿門岡千仞の生涯』(昭和五十年刊 B5 四七四頁)として、仙台の岡家か

ら出版された。東京都立中央図書館所蔵の千仞の日記、回顧録等をもとに記された貴重な労作である。また森銃三氏の「松本奎堂」(『森銃三著作集』第六卷所収)は、千仞の親友で文久三年天誅組に加わって戦死した三河刈谷藩出身の松本奎堂の伝記であるが、これも千仞の記録を中心に筆を進められているので、千仞の前半生が詳細に物語られる結果となっている。千仞の詳細な履歴はこの両書にゆずることにして、ここでは簡単に紹介するにとどめたい。

千仞は仙台藩の出身で、字を振衣といい、鹿門と号した。二十歳で江戸に上り、昌平黌で詩文を学んだ。同学の土に薩摩の重野成斎、三河の松本奎堂、会津の高橋古溪、肥前大村の松林飯山、水戸の原五軒等がいた。千仞は才も優れ、また人一倍勉強にいらしたので、やがて詩文掛に選ばれ、舎長にもなったが、安政六年(一八五九)末、ふとしたことから退学して帰国した。間もなく江戸を経て上方に上り、斎藤拙堂、広瀬旭莊、家里松嶺、藤本鉄石等を訪問した。山陽、山陰路を歩いた後、大阪に戻って昌平黌時代の旧友松本奎堂、松林飯山と三人で「雙松岡」という塾を開き、尊王攘夷の志士と交りを結んだ。文久元年から二年にかけてのことである。王政復古に際しては、仙台にあって藩論を「勤王」に統一すべく懸命の努力をしたが、保守的な仙台藩では彼の意見は通らなかつた。大槻磐溪の意見が勝を占め、北上してきた官軍を迎えて、仙台藩は奥羽列藩

同盟を組織、会津を助けて官軍と戦うことになった。このため千匱は捕えられて獄に下され、悲惨な獄中生活を経験した。幾許もなく官軍の猛攻に仙台藩は屈し、遠藤文七郎等の「勤王派」が藩政を掌握することになったため、千匱も獄から解放され、藩事務局の議員となって藩政の立て直しに参画した。「抗戦派」の但木土佐、坂英力が罪を負って江戸に送られて斬られ、大槻磐溪も投獄され、その子文彦が我が身を以て父の罪を贖わんと議事務局に自首した頃のことである。

千匱はやがて上京し、官途についたが、藩閥政府の下では志を得ることが難しかった。大学中助教に任命されたが、大学本校が内部争いのため廃止となり、失官した。ついで東京府中学少教授（あるいは少助教）となったが、この学校が火災で閉校、または免官となった。更に正院に出仕して国史の編纂に従事することになったが、予算の削減でこれも長く続かなかつた。そして明治十一年三月二十一日、当館の前身である東京府書籍館に「備」として採用されたのである⁽¹⁾。

当時の東京府書籍館幹事は二橋元長であった。東京府書籍館には「館長」の職名はなく「幹事」が館務を総裁していた。また当時の東京府知事は楠本正隆、書籍館を監督する学務課の課長は銀林綱男であった。やがて翌明治十二年四月九日、千匱は二橋元長に代って幹事に就任した。この

元長から千匱への交代について、西村正守氏は次の三つの場合が考えられるとしている⁽²⁾。第一は、元長が行政面での体制づくりは一段落し今後は内面的充実への時代と洞察し、館長もまた行政官より学者がしかるべしとして千匱に道を譲ったとする見方。第二は、館が千匱の意向のままに漢籍図書館の方向に進んでゆくことに對する元長のやりきれなさが、洋学推進の元長をして身を引かせたとする見方。第三は、元長が東京海上保険会社創立に参加のために退職したという見方。西村氏は以上三つの場合を想定しておられるが、私はこのうち第一か第三ではないかと思う。

そして背後には当時の東京府知事楠本正隆の意向が強く働いていたと思われる。西村氏によれば、当時、府と書籍館を結ぶ楠本正隆―銀林綱男―二橋元長―帰山常吉のラインは、正隆が新潟県令時代の新潟県庁の人事構成の再現であるという⁽³⁾。元長は正隆によって東京府書籍館に招かれたのであったが、千匱も正隆に推されたのであった。千匱の日記『萍蓬日曆』（東京都立中央図書館蔵〔岡鹿門雜輯〕第二八六冊）の明治三十五年二月九日の条には、「得楠本正隆計音、愕然。余長書籍館、由斯人薦」とある⁽⁴⁾。

楠本正隆は肥前大村藩の出身で、千匱のかつての友松林飯山と同藩であり、同志であった。飯山は千匱と同じく昌平黌に学び、秀才の誉が高かった。前述のように、飯山は文久元年から二年にかけ、大阪で千匱、奎堂と「雙松岡」

という塾を開き、尊王攘夷の士と交りをつ結んだことがあった。後に帰国し、藩政に参画し、藩公の信任も厚かったが、慶応三年正月僅か二十九歳の若きで、反対党の兇刃に倒れた。正隆も大村藩で「藩論を定めて薩長二藩との結合を策した」というから、飯山とは志を同じくしていたのであろう。飯山の遺稿は明治になってから『飯山文存』（松林義規 明治十一年刊）として出版されたが、その巻頭に付されている千仞の序文によると、東京府知事楠本正隆が企画し、千仞に手訂本及び遺稿を付し論定せしめたものという。『飯山文存』の刊行が明治十一年であることから推測すると、飯山の遺稿の出版計画を契機に正隆と千仞は知己となり、不遇であった千仞を正隆が東京府書籍館に採用したのではあるまいか。死せる飯山が千仞と正隆を結びつけたのであろう。更に想像を逞うすれば、始めは「傭」として採用したが、折を見て「幹事」にするという心積もりが当初から正隆にはあったのではなからうか。いずれにせよ、千仞に「幹事」の職をゆずった二橋元長と千仞の交友はこれ以後も続いたようで、明治十七年五月末、千仞が中国訪問の旅に出た時も、元長は横浜港まで見送りに来ている。

文名高い香港のジャーナリスト王韜（字は紫詮）が来日したのは、千仞が東京府書籍館幹事に任命されて間もない明治十二年五月のことであった。

太平天国と王韜

岡千仞は「明治維新」という日本の大変革期を苦難に満ちながら乗り越えてきたが、王韜も「太平天国」という中国の大動乱期を親しく経験した。しかも王韜の場合には、その大きな渦に巻きこまれ、亡命という数奇な運命を辿らざるを得なかった。王韜の研究としては最近次のものが出版されたが、これが最も精しいようである。

Cohen, Paul A.: *Between tradition and modernity;*

Wang T'ao and reform in late Ch'ing China.

Cambridge, Mass., Harvard Univ. Press, 1974.

357p.

また次の研究もあるらしいが、寓目の機会を得ていな

い。

McAleavy, Henry: *Wang T'ao; the life and writings of a displaced person.* London, The China Society, 1953.

比較的まとまった研究としては、次のものがある。

羅香林『香港与中西文化之交流』香港 中国学社 民

国五十年刊——第三章「王韜在港与中国文化発展之関

係」四三—七五頁。

外山軍治「王韜と長髮賊」『学海』二一八（昭和二十

年十二月）四八一—五五頁。

増田渉「王韜について——その輪廓」『人文研究』(大阪市立大学文学会)一四一七(昭和三十八年八月)九〇—一〇〇頁。

また小野川秀美氏の『清末政治思想研究』(みすず書房昭和四十四年刊)も、改革論者としての王韜をとり上げている。

王韜は道光八年(一八)蘇州郊外の甫里で生れた。十八歳の時、県試に合格したが、翌年南京での郷試には失敗した。家が貧しかったので、上海に出て墨海書館で英国人麦都思(W. Medhurst)を助け、聖書の中国語訳に従った。才に恵まれながらも、貧乏の故に外国人の下で働かねばならない自己の境遇に不満がつづいていたのであろうか。思いがけぬ事件に巻きこまれる羽目となった。当時、広西省の金田村に蹶起した洪秀全の一派は、太平天国と称し、広西省から北上して長江の中流域に出て、更に長江を下って南京を陥れ、天京と改称してここに都した。清朝はこれに対抗して曾国藩に湘軍を組織させ、討伐に当らせたが、容易に下すことができなかった。咸豊十年(一八)太平天国軍は江南のデルタ地帯を支配下に収めようと、兵を東に進め、蘇州、常州を陥れ、上海に迫った。これに驚いた英・仏の外国勢力は、従来の中立政策を捨て、清朝に協力して上海における自己の権益を守ろうとした。ところが同治元年(六二)二月、清朝軍隊が上海附近の太平天国軍の陣地を

攻略した際に、蘇州の人「黄皖」なる者が太平天国軍の指揮官忠王李秀成に上書した上海攻略策が発見された。「洋人即ち外国勢力と結んで清朝に当れ」という論旨である。

驚いた清朝当局者がこの「黄皖」なる人物を調査したところ、王韜ではないかという嫌疑がかかってきた。これに気付いた王韜は官憲の追及の手を脱して上海の英国領事館に逃げこみ、更に香港に亡命した。彼の母は驚きのあまり急死したが、彼はこれを弔うこともできなかった。この事件について、王韜は全く身に覚えのないことと死ぬまで主張し、無実の罪に問われたことを歎いているが、やはりこの「黄皖」なる人物は王韜その人であつたらしい。謝興堯、羅爾綱両氏の考証によつてこのことは裏付けられている。詳しくは外山軍治氏の前掲論文を参照されたい。

香港に亡命した王韜は英国人理雅客(James Legge)を助け、中国古典の英訳にたずさわっていたが、やがて理雅客とともに英国へ渡った。同治六年から九年(一八六七)にかけてのことである。その後、香港に帰って『循環日報』を創刊し(8)、ジャーナリズムの第一線におどり出た。彼の書く論説は、西洋文明の優れた点を取り入れる改革論で、その学識の淵博、眼光の遠大は多くの識者の注目するところとなつたという。彼はまた同治十一年(七三)には『普法戦紀』十四巻を編集刊行した。この書は一八七〇年から七一年にかけてのロシアとフランスの戦争についての新聞ニ

ユースを張宗良等が翻訳し、王韜が編集したもので、間もなく日本に輸入され、日本の文士連を大いに感激させた。その訓点本、読み下し本もいくつか出版された(9)。重野成斎、亀谷省軒、栗本鋤雲等は感激のあまり、この書の編者王韜の日本招聘を計画するに至った。岡千仞もこの企画に加わり、かって香港に航して王韜の知己となった寺田望南が招待状を送ることになった。王韜はこの招きを受けて来日したのである。

王韜の来日と東京府書籍館訪問

王韜は光緒五年閏三月初九日、即ち明治十二年四月二十九日に上海を出発し、長崎、馬関を経て、神戸に上陸した。大阪、京都で数日を過した後、五月十三日に横浜に到着した。翌日寺田望南に迎えられて上陸し、ただちに東京へ向い、文部省、大蔵省を訪れた後、東台長舵亭で二十二人の日本人文士と会合した。この二十二人の中に岡千仞もいたことはもとよりである。王韜はこの日以降、八月二十三日に帰国の途につくまで、主として東京に滞在し、訪問客と招待宴に明け暮れ、殆んど席の暖まる暇もないくらいの大歓迎を受けた。この王韜の来日については、彼自身が記録し、栗本鋤雲が訓点を付して刊行した『扶桑遊記』三卷(報知社 明治十二・十三年刊)があり、これを紹介したのものにも次のものがある。

布施知足『遊記に現明治時代の日支往来』 東亜研究会
昭和十三年刊 二二一―三四頁。

実藤恵秀『近代日支文化論』 大東出版社 昭和十六年刊 五二―一〇〇頁。

木下彪(周南)『明治詩話』 文中堂 昭和十八年刊

二九九―三三六頁。

明治の初年、この王韜ほど日本文士連の大歓迎を受けた外国人は恐らくおるまい。彼に教えを請い、彼と詩酒をともにすることを無上の光榮と考え、彼の著書に自己の名が留められることを切望した日本文人の数は大変なものであった。なかでも千仞は彼の最大の讚美者であった。千仞ほど王韜に心酔し、その来日中に影の形に添うように行動した人物はおるまい。実藤氏は『扶桑遊記』に見える日本人の登場回数をあげておられるが、千仞の登場は実に二十八回に及ぶ。これは寺田望南の三十七回につぐもので、佐田白茅の二十六回、重野成斎の二十三回、小牧昌業の十五回等を凌ぐ。回数では寺田望南に及ばないが、その親密度は日を経るに従って望南を凌いできたようで、王韜の最後の日程である日光行には望南は加わっていないが、千仞は甥の文治を伴って参加している。『扶桑遊記』に見える王韜・千仞の出会いをひとつひとつあげるとは差控えるが、その中には千仞の王韜に対する異常なまでの傾倒ぶりが見られる。例えば、王韜が夜床に就いてから河野通之を

伴なつて訪問したり(五月十八日)、自分の記した文稿を王韜に示したり(同二十一日)、昌平饗時代の友小笠原東陽、木原老谷(元礼)を紹介するために訪問したり(六月十日、同二十六日)、さらにまた齒痛に苦しむ王韜を歯科医に連れていったりして(六月十七日)、その交友の中には千仞の細やかな心づかいがうかがわれる。五月二十三日の夜のごときは、佐田白茅等と隅田川畔で遊んだ王韜が気に入りの芸妓小勝を伴なつて宿舎に帰ったところを、千仞と望南が押しかけている。この時は王韜もいささか慌てたであらう。

また王韜が各界の名士に招待された宴席にも千仞はよく同席していた。五月二十九日、報知社主の小西義敬が大橋万千楼に招待の宴を張った時も、十一人の列席者の中に千仞はいた。席上千仞は次のように王韜に言った。

先生且に千日の酔を尽せ。敝邦唐より以下、晁衡、吉備大臣の如く、屢々中華に遊ぶ。而して中華より是一名士の東游する者無し。今先生中華の名士を以て遊ぶは、夫れ豈に偶然ならんや。願わくは留り住みて以て賞析の歡を尽せ。

この讚辞にはさすがの王韜も恐縮したらしく、次の如く記している。

鹿門抑々何ぞ重く僕を見るや。僕自ら知る、学ぶ所東國の諸名士の師為るに足らざるを。鹿門の言を聆き、

覺えず通身汗下る。人は固より自知の明有り。僕何ぞ敢て此を以て自大せんや。

王韜と日本文士連との對話はすべて筆談であつたらしい。六月一日、千仞が重野成斎、栗本鋤雲とともに訪れた際のことを、王韜は「筆談往復、幾んど慘澹經營の状あり」と記している。

六月二十六日、王韜は千仞を伴なつて神田の聖廟に詣で、東京府書籍館を訪問した。『扶桑遊記』によると、館寮の帰山海室、山田松齋が応待したとある。これが帰山常吉と山田重任であることは言うまでもない。重任は編輯掛(洋書担当)であつた。当時の書籍館について、王韜は次のように記している。

広く書史を蓄え、日本中華泰西三國の書畢く具わる。内外士子の入りて縦觀するを許す。館を開きてより今に至り、就読する者日に多し。邇來、日に三百余人に至る。名蹟不朽を保つを得。ただ開館日浅く、蓄う所の中土の書籍、僅に九万三百四十五冊、西洋書籍、僅に一万四千六百七十冊。此の外尚浅草文庫有り。蔵書頗る珍本多し。

館寮——帰山氏か山田氏か——が何子裝星使(何如璋)の詩を示し、王韜にも一詩を請うた。王韜は次の七律一章を作り、練素(白絹)に書した。

夙昔同文本一家。頼宮制度似中華。

極知洙泗宗風遠。不_二独蓬萊勝地誇_一。

百首逸書逃_二世外_一。千年秘籍出_二瀛涯_一。

娜瓏何幸身親到。眼福於_レ今十倍加。

この詩は王韜の詩集『蘅華館詩錄』巻五にも、「偕_二鹿門_一同謁_二神田聖廟_一。兼觀_二書籍館_一。」と題し、収められている。当時の東京府書籍館の蔵書は貧弱であった。王韜は来日中、何か調べものがあると、寺田望南の読杜草堂を訪れた。望南の蔵書の方がレファレンスブックが揃っていたのであろうか⁽¹⁰⁾。

八月一日、王韜は日光見物に出発した。同行者は重野成斎、岡千仞等八人であった。この時の旅行でも千仞は絶えず王韜の傍にあって細やかな心づかいを示している。甥の文治を同行させたのも、雑用を分担させるためであったのであろう。一行は八月十日の夜半帰京したが、この頃から帰国が近付いた王韜の身辺は忙しさを加えてきたらしい。千仞は日光行の八月一日から十五日まで休暇をとっていたようで、上野図書館には八月十五日付の帰任届の写しが残っている⁽¹¹⁾。

王韜が帰国の途に就くべく横浜を出港したのは八月二十三日であるが、その直前になって彼と書籍館との図書交換のことが起つたらしい。本稿の冒頭に掲げた資料(甲)は王韜の出発の前日八月二十二日の起案であり、(乙)は出発後の二十六日の起案である。恐らく王韜は来日に際して何部かの

自著を携えてきたのであろう。そのうち残ったものを帰国に際し東京府書籍館に寄贈したいと千仞に申し出たのではあるまいか。これに対し王韜を敬慕してやまない千仞が、大日本史と地球儀二箇を贈り、「交換」の形をとったのではあるまいか。王韜から東京府書籍館に渡された図書はすべてで十六部七十二冊(あるいは七十八冊)であるが、すべてが二部づつであるから、正本は八部三十六冊(あるいは三十九冊)である⁽¹²⁾。これに対し書籍館から王韜に渡されたのは「大日本史百冊(正しくは百三冊)」と「地球儀二箇」であった。『明治十三年学務課往復綴 東京府書籍館』に綴じこまれている「府税を以て書籍購入」の頭書のある資料には

金拾五円 大日本史

百三冊

金拾五円 同

但交換下渡分 百三冊

とあり、十五円で王韜に提供する分を買ったことが示されている。また冊数も百三冊であったらしい。この書類には当時購入した和漢洋書の値段が記されているが、『平津館叢書』が四十八冊で五円五拾銭、『随園三十種』が七十九冊で十二円という時代であった。「大日本史 百三冊 金拾五円」は決して安いものではなかった。こうしてみると、この「国際交換」は、「交換」と名付けてはいるものの、東京府書籍館幹事岡千仞がその敬愛する清国人王韜に贈った「錢別」という色彩が強い。しかも決裁の下りたのが、王

輜が上海に帰着する前日の八月三十日であったから、決裁を待たずに——もとより内諾は得ていたのであろうが——この「交換」は実行されたのであろう。万事がおおらかな時代であった。

千仞の書籍館辞任と訪中

明治十二年十二月、東京府知事が楠本正隆から松田道之に代った。翌十三年になると、東京府書籍館の文部省への復帰が具体化してくる。五月七日、文部省は書籍館の返還を太政官に稟請してその裁下を得、七月一日を以て東京府は文部省に書籍館を返付し、同日「東京図書館」が成立した。千仞はこれを機会に辞任した⁽¹³⁾。まだ四十八歳であったが、これ以降再び官途につくことはなかった。千仞の辞任の事情については、彼の著書『北游詩草』（明治十六年刊）の巻一に

及期書籍館改属文部省。乃移病辭職⁽¹⁴⁾。

とあり、館が東京府から文部省に移されたのを機に、病氣を理由に退任したという。千仞は昌平黌時代から眼を患っていた。書籍館幹事に就任してから僅か一年三ヶ月、備時代を入れても二年三ヶ月余という短い書籍館生活であった。ところがその頃千仞の塾に住みこみ、塾僕を勤めたこともある片山潜は、後年次のような興味ある記述をしている。

岡塾は岡鹿門、千仞と号する漢学者で維新の前後薩摩の重野安釋や肥前の松林博宏及び三州の松本奎堂などと国事に奔走したものだ。仙台藩では大槻磐溪と争って負けを取り、四斗樽に入れられて城を逃げたと云う奇談もある。聖堂時代には学生中の秀才で侃々諤々の議論をなし其の意気一世を圧する概ありて、当時の学生間に尊敬されたとのことだ。維新の革新政府成り、彼は帝国図書館長となりたるも、其の意志頑強で云はば融通のきかぬ男であったのと、一は仙台藩に属すると云うので薩長土諸藩の人々に圧迫され、図書館長を止めさせられ、北海道庁に格を下げて転任を命ぜられた。此の虐待に憤慨して官を退き此の仙台屋敷の長屋の二三軒を借り受けて漢学塾を開いて居るのである⁽¹⁵⁾。

潜の記しているのは恐らく当時の噂話で、真実とは遠いかも知れない。千仞の名と号を逆にしており、「帝国図書館長」は「東京府書籍館幹事」の誤りである。また仙台屋敷内に私塾綏猷堂を開いたのは、上京後間もない明治三年頃かららしく、潜の言うように、書籍館をやめさせられてからはない。しかし明治の藩閥政府の下で、優れた才を持ちながら所を得ない不満が千仞にはつきまとっていたと思われる。まして彼は朝敵仙台藩出身とはいえ、勤王に終始し、勤王の故に投獄の憂目にも会っているのである。彼の

著『尊攘紀事』補遺卷三「島津氏護大原卿東下」の条で、維新の前に倒れた尊攘派の浪士や友人奎堂・飯山の功績を称えて、

何ぞ天の始を為す者に薄くして、而して終を為す者に厚きや

と歎いているのは千仞の真実の声であろう。

昌平黌時代からの友人木原老谷（元礼）は、千仞について、

顧みるに振衣（千仞の字）連蹇として進まず、下僚に淹滞す。振衣以て意と為さず。曰く、「吾万世の伸を以て一時の屈に敵せん。富貴何をか為さん。方に且に文を作らん」と。孜孜として輟まず。

と記している⑬。千仞は官途の不遇を文の精進によってまぎらわさんとしていたのであろう。官を辞してからの千仞は、芝の私塾で漢学を教授するかたわら、天下を漫遊した。彼の塾からは片山潜、呉秀三、館森鴻、石井研堂、小越平陸等、多士済済の人物が輩出した。

明治十三年八月、彼は北海道へ旅立ち、開拓に従っている旧仙台藩の人人と会った。帰途函館で王韜の『蘅華館詩録』を入手し、その中に自分の名が何度か出ているのに喜んだ。家人が函館まで転送してくれたのである。中国訪問の気持はこの頃から強まったのではなからうか。

明治十七年から十八年にかけて、千仞は中国を訪問した。

この時の旅行記は『観光紀游』十卷（明治十九年刊）としてまとめられ、この際に作られた詩は『観光游草』二卷（明治二十一年刊）に収められている⑭。『観光紀游』卷一の序に

この游、香港に航し、王紫詮韜に見え、しかる後に四方を歴游せんと擬る。たまたま紫詮書して居を滬上に移すと告ぐ。乃ち上海に航す。

とあるように、当初の予定ではまず香港に行くはずであった。それが王韜の上海転居によって、行先が変更したのである。太平天国の加担者として、いわば清朝の「お尋ね者」であった王韜も、この頃になって漸く郷里に近い上海に住むことが許されたらしい。李鴻章の黙許があったという。千仞の訪中には甥の濯万里が同行した。清国公使館での勤務を終え帰国する楊守敬（惺悟）も同船した。明治十七年五月二十九日に横浜を出帆して、神戸、馬関、長崎を経て、六月六日に上海に上陸した。樂善堂の岸田吟香が迎えに出ていた。千仞はただちに王韜を訪問したが、王韜は「書を

得て後、日夜以て待つ」と再会を喜んだ。しかし王韜はこの頃既にアヘン中毒にかかっていた。吟香が「紫詮（王韜の字）」しばしば頭痛を説く。坐に勝えざる者の如し。恐らくは癩毒ならん」と千仞に告げた。王韜を崇拜してやまなかった千仞もこれには驚き、失望したのであろう。九日に訪れてきた張煥綸、葛士濬にこのことを告げると、士濬は「洋烟の盛

行は、あるいは憤世の士、烟に借りて一切の無聊を排するに由る。特に庸愚の小民を誤るのみに非ず。聡明の士人もまた往往にしてその毒を嬰ふ」と答えた。千仞は十一日に凄然たるアヘン館を視察している。

千仞の訪中は『申報』の記事になつたらしい。「日東の文豪某、著書千巻を携え、中土山水の游を為す」と記されたというが、これは恐らくは王韜もしくは彼の婿である銭昕伯の筆になるものである。千仞は優れた漢学者であつたが、中国語の会話は全くできなかった。文人との交遊、要人との対話はすべて筆談であつた。また中国旅行中も常に和服を着用していたようで、これが民衆の注目を浴びた。

千仞は六月下旬から二月間、蘇州、杭州に遊び、西湖の風景を満喫した。九月末から二月間、天津、北京等を訪れ、李鴻章、盛宣懷に対面した。いずれの場合も、上海を基地とし、ここから出発し、ここへ帰つた。王韜との交遊は彼の上海滞在中ずっと続いた。当時は清仏戦争の最中であり、朝鮮半島をめぐる日清の關係も緊張していた時であつた。二人は日中の提携を論じ、西洋列強との対決の方法を語り、西洋文明の受入れについて話し合つた。また中国を損う毒として、烟毒と六経の毒と賄賂の毒をあけて、議論を戦わせた。また王韜の来日時の思い出話にも花を咲かせた。王韜にとつては日本での大歓迎は生涯での楽しい思い出であつたらしい。再度の訪日を希望していたようであ

る。十二月末に寺田望南が上海に来たことも二人を喜ばせた。翌明治十八年一月、千仞は広東へ向つた。これも王韜に「閩粵は暖地、宜しく冬遊すべし」と奨められたからである。一月六日に王韜主催の送別の宴に招かれ、翌七日に出港した。しかし広東到着後間もなく病にかかり、容易に直らず、香港に移つて、ここで治療を受けた。癒えて帰国したのは四月であつた。帰路は香港から日本に直行したので、王韜と会うことはなかつた。光緒二十三年即ち明治三十年(一九〇四)王韜は上海で病歿した。享年七十歳であつた¹⁸⁾。

千仞の著書と墓のことなど

千仞は中国から帰つて後も天下漫遊を続けた。その足跡は北は北海道から南は沖繩にまで及んでいる。大正三年二月十八日、上大崎の自宅で逝去した。その直前、従五位に叙せられた。享年八十二歳。目黒の祐天寺に葬られ、戒名は「松巖院嶽蒼千仞居士」である。彼の遺著草稿は長子百世氏の手から東京都立日比谷図書館に移され、現在は都立中央図書館に蔵されている。『東京都立日比谷図書館旧蔵特別買上文庫目録』(昭和四十四年刊)には、「岡鹿門雜輯」として計二九八冊の内容が掲げられている。この資料を中心に森銑三氏が「松本奎堂」を書かれ、宇野量介氏が「鹿門岡千仞の生涯」をまとめられたことは既述のとおりであ

る。また彼の旧蔵書は東京大学附属図書館に納められたと聞いている。

彼の著書のうちには出版されなかったものも多かったが、当館の蔵書を検してみると、次の十七部が刊行になっている。簡単な解説を加えて列挙してみよう。

(一) 『米利堅志』四卷 格堅勃斯原著 岡千仞・河野通之訳 光啓社 明治六年刊 二冊 八特三一—六二九

原著者は George Payn Quackenbos, 1826—1881. 例言には「格堅扶」とも記されている。河野通之が翻訳し、千仞がこれを「潤色」したという。当時の千仞は中学が閉鎖し、「無事に苦しんでいた」という。本書の原書名は明かでないが⁽¹⁹⁾、千仞の例言によると、瀛環志略、聯邦志略、万国公報、格物入門等を参照して補ったという。本書は当館には二部あり、複本には正本にない同治十三年^(七八)の李善蘭^(中国の著名な数学者)の序が付されている。その末にある明治八年三月の千仞の誌によると、「小牧篤卿が大久保大臣に従って北京へ行くのに持たせ、柳原公使に依託したところ、公使が同文館の丁韞良(W. A. P. Martin)を介し李善蘭に序を求めた」という。また国際文化振興会編刊の『中訳日文書目録』(昭和二十年刊)によると、本書は光緒二十二年^(九六)中国の新学書局から複製されたようである。

(二) 『法蘭西志』六卷 猶里原撰 高橋二郎訳述 岡千

仞刪定 露月樓 明治十一年刊 三冊 八三一—五四四
原著者猶里は Victor Duruy. 附言によれば二郎が次の三書を抄訳し、千仞が刪定し、論贊を加えたという。

法国史要(プチーイルヂストアルドフランス) 一八六六年刊行⁽²⁰⁾
近古史略(イストアルデタンモデルヌ) 一八六九年刊行⁽²¹⁾
法国史(イストアルドフランス) 一八七〇年刊行⁽²²⁾

既述の『中訳日文書目録』によると、本書も湖南新学書局で複製されたらしい。複製年代は記されていないが、『米利堅志』とほぼ同じ頃と思われる。

(三) 『東旋詩紀』 岡千仞著 明治十三年刊 一冊 (蔵名山房雜著) 八二—一三二

明治十三年秋、千仞が東京府書籍館幹事任中、故郷の仙台に帰った時の詩集。この旅行の際の休暇願と帰任届が『明治十二年学務課往復綴』に残されている。

(四) 『使会津記』 岡千仞著 明治十五年刊 一冊 (蔵名山房雜著) 八六七—一三八

明治二年秋、千仞が仙台藩公の命で会津城に駐していた奥羽鎮撫使四条公に使した時の記録。動乱直後の奥州の荒廃振りが画かれている。

(五) 『禺子日録』 重野安釋・水本成美・岡千仞著 明治十五年刊 (蔵名山房雜著) 八六七—一二六

嘉永六年ペルリが去って間もない頃、当時昌平蠻にいた千仞等三人が、相州から房州、更に下総と旅行した。この時に三人が輪番で書いた旅日記を千仞が後になって出版した。この時、千仞は帰途二人に別れ、銚子にいた父を訪れている。

(丙)『熱海遊記』 岡千仞著 明治十五年刊 一冊 (藏名山房雜著) 八六七—一三三〇

安政六年、千仞は大槻磐溪、橋本梅処と熱海に湯治に赴いた。この時の旅行記で、千仞はこの稿を当時名古屋にいた松本奎堂に送った。奎堂はこれに評語を添え、序を付したが、その序はなかなか辛辣である。千仞が後になってこれを出版した時に、奎堂の序を付したのも、千仞の奎堂への厚い友情を物語るといえよう。

(乙)『北游詩草』二卷 岡千仞著 明治十六年刊 一冊 (藏名山房雜著) 八六七—一三三〇

千仞は明治十三年東京府書籍館幹事を辞任して間もなく、北海道を旅行した。維新後、仙台藩では両伊達氏、片倉氏はじめ北海道へ行って開拓に当った人が多かった。千仞はこれらの人々と旧交を温めた。

(丙)『涉史偶筆』六卷 『涉史統筆』七卷 岡千仞著 明治十五年刊 統筆同十六年刊 合二冊 (藏名山房雜著) 八六七—一三三〇

偶筆は織田信長、豊臣秀吉、徳川家康の三代のことを記

し、統筆は徳川秀忠、家光の二代のことを記している。偶筆を書いたのは、文久三年頃で、千仞は志を得ず、仙台で失意の中にあつた。草稿を遙か肥前の松林飯山の下に送り、飯山は慶応二年、これに序を寄せた。この序も名文である。

(丙)『尊攘紀事』八卷補遺四卷 岡千仞著 竜雲堂 明治十五年刊 補遺鳳文館 明治十七年刊 合三冊 (六冊) 八二—一四八

ペルリ来航から大政奉還までの幕末史を紀事本末体で記したもの。千仞の見聞、体験、見解も併せ記されている(23)。

(丙)『觀光紀游』十卷 岡千仞著 明治十九年刊 三冊 八六—一七五

(乙)『觀光游草』二卷 岡千仞著 明治二十一年刊 一冊 八一—一五二

中国旅行の時の記録と詩集。

(丙)『訥耳遜伝(軍人必読)』 羅北叟梯著 内田成道・岡千仞訳 明治二十年刊 二一〇頁 八二—一四〇

原著者は Robert Southey. 原書名は The life of Nelson. 原書の初版は一八一三年のようであるが、その後何回も版を重ね、改訂されたようである。『金鉄腸(激浪濯血)』サウセイ著 城慶度訳(金桜堂 明治二十一年三月刊 八特—一五六六)も同じ原本から別人による翻訳であろう。原本の翻刻も明治二十八年(九五)に金刺と開新堂から出さ

れているし、明治三十年には国民英学会から“Notes on Southey's life of Nelson, by Michael Macmillan”（二一九一五六）も出されているから、よほど日本では読まれたものらしい。当館にはこのほか一八九〇年のマックミラン本もある（八二一七六）。

(四)『硯癖齋詩鈔』岡千仞著 明治二十二年刊 三冊
八六九一四四

千仞の詩集「劫灰余草」「東游詩紀」「北游詩草」「薄游雜詩」「觀光游草」を収録。

(四)『塩松勝概』二卷 岡千仞著 岡濯編纂 明治二十五年刊 合一冊 八六六一一二

塩釜、松島の地誌。千仞は明治十七年に西湖に遊んだ時、翟灝の『湖山便覽』（光緒元年刊）を得た。これに倣って記したものである。当館は二部所蔵し、復本は同年の再版本で、岸田吟香の序が付され、印刷者も異り、二冊本である。

(四)『仙台志料』首一卷十八卷 岡千仞編 明治三十年刊 三冊 八一〇八一五〇

伊達氏の世系、東北統治の逸話、大槻磐溪のことなどを集録した仙台関係資料集。

(四)『山寺攬勝志』岡千仞著 山寺村（山形県）保菴会（立石寺） 明治三十四年刊 二八頁 図版 八一—六一—一五三

山形県の山寺、即ち宝珠山立石寺の寺志。明治三十二年に記したもの。

(四)『蔵名山房文初集』六卷 岡千仞著 岡百世 大正九年刊 合一冊（三冊） 八一—一三三—

千仞の生前中、一族子弟の間で彼の文集を刊行する計画があったが、実現できず、死後その「初集」が刊行された。内容は巻一、二が序、三が記、四が書と論、五が伝と銘、六が題、跋、書である。内容を検すると前に発表したもの大幅に訂正した跡がある。千仞は文に敏しく、自分の書いたものは刊行後も絶えず加筆補正していたのであろう。

このほか昭和十三年から十四年にかけて、『望雲紀程』『奉歓紀行』等十一の遊記がガリ版で岡家から出版されたが、当館には所蔵されていないようである。

以上を通観してみると、明治十年代、殊に十三年から十六年の間に集中的に刊行されているのに気付く。しかも(四)から(六)までは「蔵名山房雜著」という叢書名が付されている。これは千仞がこの頃中国訪問を計画し、自分の著述を刊行してこれを携えて行くことを考えていたのではないだろうか。「著書千巻を携え、中土山水の游を為す」と報じた申報の記事はこのことを裏書きする。恐らく千仞はこれら自著を相当部教携行して訪中し、学界、政界の要人連に寄贈したのではあるまいか。この方法も恐らくは王韜の訪日に倣ったのであろう。

また千仞の著作ではないが、彼が訓点を付したり、校閲したりした和刻本漢籍もある。当館の蔵書の中で目についたものだけでも次の三点がある。

『史記評林』百二十卷 巖谷修・岡千仞・石川鴻齋等
校点 鳳文館 明治十六年刊 一五冊 <222.03—R
741>②)

『資治通鑑』岡千仞点 重野安釋校 大阪 修道館

明治十八年刊 有欠 六七冊 △特五六—六△

『唐宋八家文読本(纂評音註)』岡千仞校 斎藤竹堂評

岐阜 成美堂 明治二十四年刊 一六冊 △特三四—

二三九△

次の二つはあるいは岡千仞のものではないかと思われるが、断定は差控えたい。前者は特にその可能性が強い。

『欽仰録』末広清次郎編 三省堂 明治四十一年刊

二三頁 △二二—三四七三△

この書は故北白川宮能久親王の第三王子輝久王の時習舎及び学習院における日常生活の模様を記したものである。巻頭に大村徳敏の識が付され、奥付には著作兼発行者として末広清次郎の名が記されている。ただ本書の大部分を占める本文の末尾に「己六月八日夜於鶴沼海荘燈下 道人千仞(る)」と記されている。この「道人千仞」があるいは岡千仞ではあるまいか。『帝國図書館和漢図書書名目録 第三編』の二六一頁には「末広清次郎編(岡千仞著か)」と記し、断定

を避けているが、『明治期刊行図書目録』第一巻の七四八頁には、「岡千仞著 末広清次郎編」と断定を下している。本文中に当時時習舎の教授として岡百世(千仞の長子)の名が見えるから、百世の關係で千仞が執筆したのであろうか。千仞はこの年即ち明治四十年にはすでに七十五歳に達していた。

『日本詩軍』烏玉山人著 新進堂 明治二十八年刊
八二・三九頁 △特六六一—九一七△

この書は明治二七・八年の日清戦争についての狂詩であるが、『明治期刊行図書目録』第四巻の八二四頁には「岡鹿門(烏玉山人)著」と記され、千仞の著書としている。しかし浅学の私にはこの書自体から著者「烏玉(たま)山人」が即ち岡千仞であることを確かめることができなかった。あるいはそれと思われるものとして「第一詞壇長 岡四位」という記述があるが、「岡四位」は「おかし」の宛字かとも思われ、千仞の著であると断定することは避けたい。

千仞の墓は目黒の祐天寺にある。宇野量介氏の前掲書四〇六頁にも明記してあり、同氏の『明治初年の宮城教育』(仙台 宝文館 昭和四十八年刊)の二二七頁にはその墓碑の写真が掲載されている。しかるに平凡社の『大人名事典』第一巻(昭和二十八年刊)の五四九頁の「岡千仞」の項は、

幕末、明治時代の漢学者。天保四年十一月二日仙台に生る。(下略)

と、確かに元東京府書籍館幹事岡千仞の伝記を記しながら、末尾に

墓所、東京市芝区三田北寺町、宝生院

と、場所も寺名も全く違った記載をしている。不思議に思つて当館人文課の沢西主査に調査を依頼したところ、思いがけない結果が出た。即ち、時山弥八氏の『関八洲名墓誌』(大正十五年刊)の二〇頁には

岡千仞(儒) 大正二年二月十八日歿年八十二 三田北寺町一七(眞) 宝生院 仙台人、字振衣、初名教助、号廉門、従五位に叙す

と記されている(26)。また藤浪和子氏の『東京掃苔録』(昭和十五年初版 同四十八年再版)の二二頁には

宝生院(北寺町一七) 新義真言宗智山派
岡鹿門(儒家) 名千仞、字振衣、通称啓輔、仙台養賢堂にて大槻磐溪につき、(中略) 大正七年十二月十八日歿。年八十一。眉山千仞居士。

と記されている。即ち、『関八洲名墓誌』も『東京掃苔録』も、平凡社の『大人名事典』と同じく、元東京府書籍館幹事岡千仞の墓を「芝北寺町 宝生院」としているのである。ただ結城素明氏の『芸文家墓所記』(学風書院 昭和二十八年刊)の二四四頁には

岡千仞(儒) 同 中目黒三丁目 祐天寺墓地
と正しく記述されている。

どうしてこのような混乱が生じたのであろうか。宝生院の現在の住居表示は「港区三田四丁目一番」であり、その境内の墓地に確かに「岡千仞」の墓がある。墓碑の正面には

直鏡貞清禪定尼

故従五位勲四等岡千仞墓

現夢清光童子

と刻されているが、右側面に

眉山千仞居士大正七年十一月十八日歿

とあって、藤浪氏の記述と同じく、戒名と歿年が千仞のそれと違うのに気付く。この宝生院の「岡千仞」氏は元東京府書籍館幹事岡千仞と同姓同名の別人なのである。令孫岡直義氏の話では、この「千仞」氏は伊予の久松藩出身の士族で、明治維新後陸軍に入り、陸軍少佐にまでなった人のことであった。思うに本稿の主人公たる岡千仞が芝の仙台屋敷内に私塾を開き、葬儀も芝の青松寺で行われたため、宝生院の陸軍少佐岡千仞の墓が、元東京府書籍館幹事岡千仞の墓であると誤り伝えられたのであろう。二人の岡千仞がともに従五位を贈られたのも混乱の原因になったものと思われる。時山氏はともかく、藤浪氏は、その記述の内容から見て、自ら宝生院に足を運ばれ、墓碑を確かめら

れながらも誤られたのではないかと思う。三つのレファレンスブックが同じ誤りをおかしていることは心すべきことであらう。

註

(1) 上野図書館所蔵の『明治十三年学務課往復綴 東京府書籍館』には千俣の履歴書がとじこまれている。

(2) 西村正守「東京書籍館の人々」『図書館学会年報』二〇一—一九七四年七月 五一頁。

(3) 同 五〇—五一頁。

(4) 『萍蓬日曆』は細字でびっしり書かれており、判読は難しい。私はこのことを宇野氏の著作で知り、現物を確認した。

(5) 平凡社『大人名事典』第二卷(昭和二十八年刊) 三八三頁。

(6) 『飯山文存』の巻末には正隆の跋も付されている。

第一丁裏。

(8) 『循環日報』は当館が一八八〇年から八四年まで所蔵している。恐らく日本に現存する唯一のものであろうが、いたみがはげしくて閲覧できない。早急にマイクロ化する必要がある。

(9) 本書の陸軍文庫訓点本については、小原正治氏が『国立国会図書館月報』一二四号(昭和四十六年七月)に、「稀本あれこれ」として紹介している。

(10) 望南は目錄学に精しく、善本の収集で有名であった。しかし蔵書を手離すことも多かつたらしく、「判を押すために本を

買うのではないか」という人もいたという(訪書会「紙魚の昔がたり」昭和九年刊——斎藤兼蔵述「先代琳琅閣とその周囲」)。

望南自筆の蔵書目録が東北大学附属図書館にあるようで、矢島玄亮氏が『江戸長崎談叢』復刊二二一(昭和四十二年九月)に、「寺田望南自筆の蔵書目録」という解説を記されている。天理図書館にも望南の蔵書目録があるようで、『新輯天理図書館図書分類目録』の第一総記の六二頁に、「寺田望南蔵書目録 写 二三枚和 Saccn」とある。『江戸長崎談叢』復刊二二(昭和四十一年十一月)には丸山季夫氏の「寺田望南追稿」、竜船堂海人(小松原淳氏)の「王紫詮・王治本と望南」という論文が掲載されており、手もとにないため確かめられないが、同誌の復刊一号にも丸山氏の望南についての論文があるとのことである。

(11) 『明治十二年学務課往復綴』自十一年度後半ケ年至十二年度前半ケ年)。内容は次の通りである。

過日御届之通十五日間賜暇中能任候処本日ヨリ出勤致候ニ付
此段及届候也

但休暇中山田重任代理御開置之処本日ヨリ解放致シ度併セテ
申進候也

明治十二年八月十五日
学務課長 岡 千俣
書籍館幹事

銀林綱男殿

(12) 王韜から東京府書籍館に渡された図書の本本八部と思われるものが、当館蔵書中にあるので、左に掲げておく。ただしいずれも「東京図書館」の蔵書印は押されているが、王韜との交換

資料であることを証明するものは見出されない。

普法戦紀十四卷 八冊 八一—七六〇

瀛壖雜誌六卷 二冊 一六九—一九〇

重訂西青散記八卷附西青文略一卷 四冊 一八四—一八七

魏廬余談八卷 四冊 一八四—二九〇

遜齋謠言十二卷 四冊 一八四—三〇〇

海陬治遊錄二卷附錄三卷余錄一卷 二冊 一八五—一六六

豔史叢鈔 七冊 一八五—一六五

破園尺牘八卷 四冊 一八五—一八〇

これらはいずれも王韜の編著書であるが、『重訂西青散記』は校訂出版だけで、彼の著作ではない。また『豔史叢鈔』は第三冊が欠本である。資料②には「八本」とあったのを訂正して「十一本」としてあるが、元来は「八本」が正しいようである。合計冊数も、②では「七十二本」を訂正して「七十八本」としているが④では「七十二本」となっている。

(13) 『明治十三年七月ヨリ十二月迄本省御達及伺並御指令 東京図書館』によると、千俣の解雇は明治十三年七月二十七日である。しかし七月一日東京図書館発足と同時に、文部少書記官小林小太郎が東京図書館長兼勤を申付けられているから、実質的な辞任は七月一日と見てよいだろう。

(14) 『硯癡齋詩鈔』(明治二十二年刊)の巻三に収められた「北游詩草」では、「會書精館隸文部省。乃移病請間。」と改められている。

(15) 片山潜『自伝』(岩波書店 昭和二十九年刊) 九六—九七頁。潜の「わが回想 上」(徳間書店 昭和四十二年刊)の一三

九頁から一四〇頁にかけても、同じような記載がある。潜と千俣の関係については、Kublin, H.: *Asian revolutionary; the life of Sen Katayama*. Princeton Univ. Press, 1964. の三六頁から四五頁にかけてとりあげられている。ただ Kublin 氏は千俣の号「鹿門」を「Shikamon」と読んでゐる。『森銚三著作集』別巻索引の二五頁には、「岡鹿門」が「岡一水」と「岡巖治」の間に排列されているから、「カモン」とでも読んでいたのであろうか。この点を宇野量介氏に問合わせたところ、「ロクモン」と読むべきであるとのことであった。潜はまた千俣の塾で「得がたい友人」岩崎清七を得ることができた。この間の事情は河村望『片山潜』(汐文社 一九七四年刊)の二七頁から三七頁にかけて精し。

(16) 木原元礼『老谷遺稿』(明治三十二年刊)巻一所収「藏名山房集序」

(17) 千俣の中国訪問については、布施氏もとりあげてはいるほか、次の研究もある。しかし詳細なものではない。

竹内実『明治漢学者の中国紀行』『人文学報』(東京都立大学) 三六号 一九六三年八月 六五—九七頁。

Jansen, M.B.: *Japanese views of China during the Meiji period*—Feuerwerker, A. and others ed.: *Approaches to modern Chinese history*. Univ. of California, 1967. p. 163 ~ 189.

(18) 王韜の著作は頗る多い。P.A. Cohen の著書の巻末の文献目録が最も精しいようで、増田渉氏も積極的に収集されたようである。市古宙三・岡岡妙子編『東洋文庫所蔵近百年來中国名人関係図書目録』(『近代中国研究』第四輯 一九六〇年刊 所収)

の「王髻」の項も参考になる。ただ当館蔵書のうちに次のものがあるので特記しておく。

『破園尺牘鈔』巻一 王髻著 大谷孝蔵訓点 鍛冶ヶ谷村(神奈川県) 大谷孝蔵 明治十六年刊 一冊八特六七—一三六一

破園尺牘八巻を鈔録し、二巻としたというが、当館蔵本は巻一のみである。大谷氏の住所は「神奈川県平民 相模国鎌倉郡鍛冶ヶ谷村三百三十三番地」と奥付に記されている。

(19) G.P. Quackenbos のアメリカ史は数多く、列挙すると次のようである。いずれもヒューモンの D. Appleton の出版である。

Elementary history of the United States, with numerous illustrations and maps.

当館には一八七一年版と八四年版がある(7—50)・(35—3)。Illustrated school history of the United States, and the adjacent parts of America, from the earliest discoveries to the present time.

一八五七年版が米国議会図書館の目録に見え、当館には一八七一年版と七三年版がある(7—19)。

Primary history of the United States; made easy and interesting for beginners.

一八六〇年版が議会図書館の目録に見え、当館には一八七二年版と七三年版がある(7—51)。

また年代的には遅れるが、次の書名のものもある。

American history for schools; accompanied with nume-

rous illustrations from original designs, and colored maps. 一八七七年版が議会図書館の目録に見え、当館には八四年版がある(35—2)。

このクワッケンボス氏のアメリカ史は当時は非常に人気があったようで、通之・千仞の共訳書のほかにも翻訳が出た。

『合衆国史略』格賢勃斯著 高橋基一訳 英山堂 明治五年三月刊 一冊 八特三十一—六二四

『小聯邦史直訳(格堅勃斯)』巻上 服部照朝訳 千松楼 明治五年七月 四二丁 八特三十一—九九

『亞米利加沿革史略』初編 青木輔清訳 中外堂 明治五年 訳 二冊 八六一—五七(ウキルソン及びクエッケンボスの合衆国史の抄訳)

更に明治二十年代になると、芦田東雄、品田大吉、林朴堂(十次郎)の諸氏の訳によって『合衆国史直訳』というのが三部も出た(2)。

(2) Petite histoire de France, depuis les temps les plus reculés jusqu'à nos jours. Paris, Hachette. と思われ、フランス国立図書館の目録によれば、一八五四年に新版が出され、当館は七二年版と八三年版を持っている(94—D968p)。

(2) Histoire des temps modernes, depuis 1453 jusqu'à 1789. と思われ、フランス国立図書館の目録によれば、一八六三年版が最も古。

(2) Histoire de France と思われ、フランス国立図書館の目録では、一八六二年版が最も古いようで、当館は一八六八年版(94—D968h)と、七〇年版(9450—04) (衆議院本)を所蔵して

いる。

(23) 「尊攘紀事」は千仞の幕末維新時における行動、交友關係を知る上でも好史料である。千仞は「勤王」に終始したが、仙台藩の抗戦派（佐幕派）の人人にはこの書は受けがよくなかったらしい。下飯坂秀治編・大槻文彦校訂『仙台藩戊辰史』（仙台 蝸牛堂 明治三十五年刊）の「拾遺」に、「長歎大息」として、次のような記載がある。

或人戊辰ノ年ニ同志四五輩ト謀リテ遠藤文七郎ト岡啓輔トヲ斬テ以テ国害ヲ除カント欲シテ苦心經營セシカド遂ニ果サス然レドモ今ニシテ之ヲ思ヘバ文七郎ヲ逸シタルハ甚ダシキ遺憾ナラズ彼レ青ネギタルノミ（禰宜葱ト国音相通）子ギ具ハ臭ナレドモ事ニ大害ナシ只禪僧ノ門ニ入レラレザルノミ啓輔ハ然ラス彼ノ著書ノ尊攘記事ノ如キ事実ヲ捏造シテ国情ヲ誣ヒ主公ヲ罵リテ後世ヲ誤ル其罪大ナリ当時彼ヲ斬ラサリシヲ悔ユ噫今子老タリ如何トモスル事能ハスト天ヲ仰テ長歎大息ス

この書は「抗戦派」の人の手になるものであるが、大槻文彦の寄稿もあり、大槻磐溪の立場を知る上でも重要な資料と言えよう。

(24) 片山潜が千仞から訓点を付すことを依頼されたという「史記」は、あるいはこの『史記評林』かも知れない。しかし潜によると、この発行で大儲けをしたのは銀座の博文社であったという（『自伝』一〇二頁）。

(25) 「丁巳」とあるのは「丁未（明治四十年）」の誤りであろう。「丁巳」は大正六年で、この書の奥付に見える発行年より後に

なる。

(26) 時山氏の記述は歿年、初名、号とも少しずつ誤っている。千仞の初名は慶輔、後に啓輔と改めた。

△追記▽

昭和五十年十月、龜山隼三氏の編集発行により、『近代先哲碑文集』の第四十三集として、「鹿門岡先生碑文集」が刊行された。内容は、千仞作の碑文十六篇、「飯山文存」に寄せた序文、それに松本奎堂の「鹿門精舎記」、岡濯（万里）の「鹿門岡先生碑銘」から成っている。千仞研究の資料の一つとして追記する。

なお本稿を草するに当って、沢西・味水・中原の三氏をはじめ、多くの方々の御援助を載いた。厚く感謝の意を表したい。

（なかだ・よしのぶ 支部上野図書館長）